



歴史研究を通して 先人の思いを伝える

当別町歴史研究特別顧問

もとひろ
坂田 資宏さん

仙台藩岩出山伊達家による当別への移住や開拓をはじめ、当別の歴史を長年に亘って調べ、掘り起こしてきた坂田さん。知られていない事実が次々と明らかになります。

歴史の編纂を通して 当別と関わってきたのですね

開発局に勤めていたのですが、昭和28年に篠津原野の開墾の仕事をする事になり、当別に来ました。

そこで、当別出身の作家「本庄陸男」が仙台藩岩出山の土族による当別での移住の苦難を書いた小説「石狩川」と出会い、「こんな近くに明治維新があったのだ」と感銘を受け、当別開拓の歴史のとりこになりました。

戊辰戦争に敗れ、仙台から当別へ移住した当別開拓の歴史は、他の地域には類を見ない苦労の連続でした。私は、広く知られていない先人の苦労を伝えたいと思い、史料の収集、研究を続けました。

昭和43年に、当時の近藤辰雄町長から町史編纂への協力を依頼され、昼は開発局の仕事、夜は歴

史資料の解説と二足の草鞋を履きながらやってきました。

一番大変だったのは、史料集めでした。開拓当時のことを知る人の家を訪ね、史料が残っていないかを訪ねて回りました。

仙台藩から移住してきた方たちは、日記や記録をたくさん残していました。多くの史料が集まりました。

史料には、必死の思いで開墾に取り組んだこと、稲作が始まるまでは北陸地方から米を買い、函館経由で当別まで運んでいたことなど、興味深い事実が多く眠っていました。

まだまだ新しい発見が 出てくるのですね

現在は、稲作の歴史を明らかにするために、新しい土功組合史を書こうと思っています。

開拓当時は、食糧をどう確保するかが最大の課題でした。

記録を調べると、入植直後から村の入口である田の沢で水稲の試作を始めました。しかし、鳥獣被害や失敗の連続でした。その後、北海道稲作不適地を理由に洋食を普及するよう政策的に強要されました。さまざまな実験、試作が実を結び、明治29年には、1千町歩の造田計画が立てられ、この頃から当別村の水田開発が飛躍的に進みました。

当別の歴史は、農業とともに歩んできたと言っても過言ではありません。開拓当時の人たちは、田畑を耕すことに併せて、人材育成に力を注いできました。

私は、当別の歴史研究を通して沢山のひと々と関わり合いを持たせていただきました。当別の歴史を調べ、後世へ伝えることが、私の使命であると考えています。